

修士論文（要旨）

2021年1月

育児に専念していた女性が子どもを優先しながら非正規雇用で働くプロセス

指導 山口 一 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
219J4012
吉村 由美

Master's Thesis (Abstract)

January 2021

The Process of Women who have Devoted themselves to Childcare
Entering Non-regular Employment while still Prioritizing their Children

Yumi Yoshimura

219J4012

Master's Program in Clinical Psychology

Graduate School of Psychology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目次

第1章 研究の背景	1
1.1 アイデンティティ	1
1.2 女性のライフコースとアイデンティティ	1
1.3 母親のアイデンティティ	2
1.4 母親の就業状況	3
第2章 目的と研究意義	4
2.1 目的	4
2.2 研究意義	4
第3章 方法	4
3.1 調査方法	4
3.1.1 調査対象	4
3.1.2 調査期間	4
3.1.3 調査手続き	5
3.1.4 調査内容	5
3.2 倫理的配慮	6
3.3 分析方法	7
3.3.1 分析テーマ	7
3.3.2 分析焦点者	7
3.3.3 分析手続き	7
第4章 結果	8
4.1 分析対象者の概要	8
4.2 分析テーマの修正	9
4.3 概念	9
4.4 カテゴリー	11
4.5 結果図とストーリーライン	13
4.5.1 結果図	13
4.5.2 ストーリーライン	15
4.6 カテゴリーと概念に関する説明	16
第5章 考察	28
5.1 カテゴリーごとの考察	28
5.2 全体の考察	36
5.3 本研究の限界と今後の課題	39

謝辞

引用文献

付録

第1章 研究の背景

アイデンティティは、青年期以降もさまざまな心理・社会的変化を契機に問い直され、再吟味されて、さらに成熟していくものである(兼田ら,2007)。多くの成人男性は職業人としてのアイデンティティを幹としたライフコースとして歩むのに対して、女性は職業、家庭、個人というさまざまなアイデンティティを自己の内部で統合しつつ、成人期を生きることが求められる。子育て期の女性は自分のアイデンティティの中に母親役割を統合し、アイデンティティを再構成するという心理的課題を持っており、それまでに形成してきた個としてのアイデンティティと、新たに母親となることによって獲得されるべき母親アイデンティティが、しばしば葛藤を引き起こす時期である(岡本,1996b)。

百瀬ら(2010)によると、専業主婦として育児に専念している多くの母親は、子どもを自分で育てたい、毎日の成長を見たいと願う気持ちを抱いており、母親としての自分の存在意義に自信をもっている一方で、子どもの価値が他のものと同一でないからこそ、自分で育てたいという思いと再就労を模索する葛藤や、育児をするだけの自分でいいのかという不安を感じている。葛藤の有無には自分で育てることの意義への強い思いが大きく影響する要因となっているが、葛藤の有無に関わらず、母親たちは子ども最優先の思いを強く持っている。

母親の就業状況については、育児に専念している女性の約6割が就業を希望しており(厚生労働省,2015)、実際に児童のいる世帯における母の有職率は7割を超え、うち半数以上は非正規雇用で働いている(厚生労働省,2019a)。再就職の際には、多くの女性が、子どものための時間が損なわれないことへの強い願望により、意思決定の基本要因として職場への拘束性の低さ等を譲れない条件にしている(奥津,2009)。

以上のことから、多くの母親たちが育児に専念する生活を送った後に子育てを優先して非正規雇用として再就労をしているが、この時期はアイデンティティの再構成を伴うために葛藤や不安を抱えやすい。この時期に自己のアイデンティティがどのように変化していくのかを解明することが、子育てを経験する多くの女性のライフコースを考える際に役立つと考えられる。

第2章 目的と研究意義

本研究では、自分で子どもを育てることを自らの意思で選択して退職した女性が、子育てを優先するために非正規雇用で再就労した際にアイデンティティを再構成するプロセスを検討することを目的とする。

第3章 方法

機縁法により抽出した、育児を契機に退職し、再就労して非正規雇用で1年以上働いており、夫がいる女性10名の調査協力者を対象に1時間半程度の半構造化面接を実施した。

分析には、木下(2007)による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いた。分析テーマは「育児に専念していた女性が子ども優先を維持しながら非正規雇用で働くプロセス」、分析焦点者は「育児に契機に退職し、再就労して非正規雇用で働く、夫がいる女性」とした。

第4章 結果

M-GTAによる分析の結果、2個の大カテゴリー、11個のカテゴリー、31個の概念が生成された。ストーリーラインは以下の通りである。なお、大カテゴリーは〔 〕、カテゴリーは【 】, 概念は〈 〉で示す。

育児を契機に〈退職の決断〉した女性は、子どもが幼いうちは〈仕事より育児を優先〉することを自らの意思で選び、〈育児に必死な毎日〉のなか〈子どもに合わせた生活〉を送り〈母親としての生活に向き合う〉ことで【母親としての生活の受容】をしていく。〈育児の困難感〉や〈子どもがいることで感じられるしあわせ〉を感じながら、〈夫の協力〉や〈親のサポート〉などに支えられている。

子育てが落ち着いたら再び働こうという〈再就労の思い〉は持っており、子どもが成長して〈自分の時間があることに気付く〉ことや〈就労のきっかけ〉によって【就労を検討】するようになり、〈柔軟に対応してくれる職場〉などの【子どもを優先する働き方】が叶う〈非正規雇用で働く〉ことを選択する。就労による〈子どもへの影響を最低限にする工夫〉をしており、〈両立による満足感〉、〈家以外の居場所〉などを【就労によって獲得】したと感じている。

〈働く楽しさ〉を感じながらも、今の〈自分の中心は母親である〉ということのを再認識し、〈将来の子どもへの思い〉を抱いている。子どもの成長にしたがって母親としての子どもとの関わり方は変化していくが、子どもへの思いは変わることがなく、[子どもも仕事も大切に生活]を守っていきたいと考えている。

第5章 考察

本研究では、育児に専念していた女性が子ども優先を維持しながら非正規雇用で働くときに、母親としてのアイデンティティが個人としてのアイデンティティとが葛藤、対立するのではなく、融合されて新たなアイデンティティとして形成していこうとするプロセスが描き出された。

自ら選んだ育児に専念する生活のなかで試行錯誤しながら子どもを育てる経験を重ねることで徐々に育児への自信を獲得し、母親としての存在意義を感じるようになっていくことによって安定した母親アイデンティティが形成され、子どもの今しかない時期に積極的に関わり、子育てがひと段落したタイミングで再就労というライフプランを持ち続けたことによって、アイデンティティの危機を経験することなく生活できていたと考えられる。母親として子どもの成長に寄り添い続けられる自分でいたいと思うからこそ、母親としての自分も大切にしながら、個人としての自分としても成長することによって、ひとりの人間として発達し続けるための選択のひとつとしての再就労であり、子ども優先を維持するための非正規雇用での就労であると考えられる。子どもを優先しながら、再就労し、将来の子どもについても自分のキャリアについても考え、子どもも仕事も大切にしている自分に肯定感を感じながら生きていきたいという思いがあると捉えられた。そこには、母親アイデンティティを喪失することなく個のアイデンティティを取り込み、新たなアイデンティティとして形成していこうとする様子を見ることができた。

本研究の結果が、育児と就労を両立する女性の生き方の一つのモデルとして提示され、育児をするだけでの自分でいいのかという不安、母親である以外のライフプランが描けない不安、自分で子どもを育てたいという思いと再就労を模索する葛藤や育児と就労を両立させる上で苦悩を抱えている女性への心理的援助の一助になることを期待する。

最後に、本研究の限界として対象者に個としてのアイデンティティと母親としてのアイデンティティに葛藤を経験した人がいなかった、対象者の約半数が研究担当者と同じ趣味のサークルに属していることで健康度が標準より高い女性であった可能性があることなどが挙げられ、今後は事前調査を行った上で多様な対象者を選定することでプロセスのさらなる検討が可能となると考える。

【引用文献】

- 荒牧 美佐子・無藤 隆(2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い:未就学児を持つ母親を対象に. 発達心理学研究, 19(2), 87-97.
- 浅賀 万理江・三浦 香苗(2011). 育児初期の母親が抱える心理的混乱への適応過程-語りの分析による質的検討-. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 13,55-68.
- 藤田 ミナ・岡本 祐子(2009). 青年期における母娘関係とアイデンティティとの関連. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 8,121-132.
- 濱田 維子(2004). 仕事と家庭の多重役割が母親の意識に及ぼす影響. 日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report, 3,147-158.
- 伊藤 美奈子(1999). 個人と社会という観点からみた成人期女性の発達 岡本 祐子(編著). 女性の生涯発達とアイデンティティ. 北大路書房
- 兼田 祐美・岡本 祐子(2007). ポスト子育て期女性のアイデンティティ再体制化に関する研究. 広島大学心理学研究, 7,187-206.
- 柏木 恵子・若松 素子(1994). 「親となる」ことによる人格発達 : 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 5,72-83.
- 木下 康仁(2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実戦 質的研究への誘い. 弘文堂
- 木下 康仁(2007). ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂
- 国眼 真理子・松下 美知子・西村 智子・藤原 喜悦(1987). 女性のライフサイクルに関する研究 I・II. 日本教育心理学会論文週, 482-485.
- 厚生労働省(2010). イクメンプロジェクトとは.
<https://ikumen-project.mhlw.go.jp/project/about/> (2020年5月23日取得)
- 厚生労働省(2012). 第1回21世紀出生児縦断調査結果の概要.
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/shusshoujib/01/dl/01-2.pdf>(2019年7月2日取得)
- 厚生労働省(2015). 女性の再就職・再雇用. <https://comeback-shien.mhlw.go.jp/source/pdf/woman.pdf>(2019年12月15日取得)
- 厚生労働省(2019a). 平成30年度国民生活基礎調査 結果の概要.
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa18/dl/02.pdf>(2019年7月2日取得)
- 厚生労働省(2019b). 第8回21世紀出生児縦断調査結果の概要
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/syusseiji/17/dl/kekka_01.pdf(2019年7月2日取得)
- 丸谷 充子(2014). 子育て支援における親の生涯発達支援の意義-親としてのアイデンティティの統合-. 浦和大学・浦和大学短期大学 浦和論議, 50,133-147.
- 百瀬 良・田中 奈緒子(2006). 専業主婦は「個」としての自分を意識しているか-「個」としての自分と, 妻としての自分・母親としての自分との関係-. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 9,63-73.

- 百瀬 良・浅賀 万理江・三浦 香苗(2010). 未就園児育児に専念する母親の再就労に対する思考過程についての質的検討-文化的要因との関連から-. 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 12, 99-113.
- 内閣府男女共同参画局(2009). 男女の能力発揮とライフプランに対する意識に関する調査. http://www.gender.go.jp/research/kenkyu/noryoku_lifeplan/pdf/life2-5.pdf(2020年5月23日取得)
- 内閣府(2016). 男女共同参画白書平成29年版.
http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h29/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-00-12.html(2019年10月20日取得)
- 岡本 祐子(1996a). アイデンティティ生涯発達論の展開. ミネルヴァ書房
- 岡本 祐子(1996b). 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究. 日本家政学会誌, 47(9), 27-38.
- 岡本 祐子編(1999). 女性の生涯発達とアイデンティティ. 北大路書房
- 岡本 祐子・松下 美知子編(2002). 新女性のためのライフサイクル心理学. 福村出版
- 奥津 眞里(2009). 主婦の再就職と働き方の選択-結婚・育児等によるリタイアと職業復帰. 日本労働研究雑誌, 586, 68-77.
- 清水 紀子(2004). 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ. 発達心理学研究, 15(1), 52-64.
- 杉村 和美(1999). 現代女性の青年期から中年期でのアイデンティティ発達 岡本 祐子(編著). 女性の生涯発達とアイデンティティ. 北大路書房
- 田丸 尚美(2008). 育児期の女性に見られるアイデンティティの危機と家族関係. 心理科学, 29(1), 1-9.
- 豊田 史代・岡本 祐子(2006). 育児期の女性における「母親としての自己」「個人としての自己」の葛藤と統合-育児困難との関連-. 広島大学心理学研究, 6, 201-222.
- 山口 雅史(2010). 母親になるということ-母親アイデンティティを巡る考察-. あいり出版
- 矢澤 澄子・国広 陽子・天童 睦子(1998). 少子社会と「母アイデンティティ」のゆくえ-若い母親のライフスタイルと子育て意識調査から-. 東京女子大学社会学会紀要経済と社会, (26), 41-64.